

○ おさらいから

- ・マルクス・ガブリエル(独 1980-)『なぜ世界は存在しないのか』(2018)
- ・カルロ・ロヴェッリ(伊 1965-)『時間は存在しない』(2019)
- ・斎藤幸平(日 1987-)『人新生の資本論』(2020)

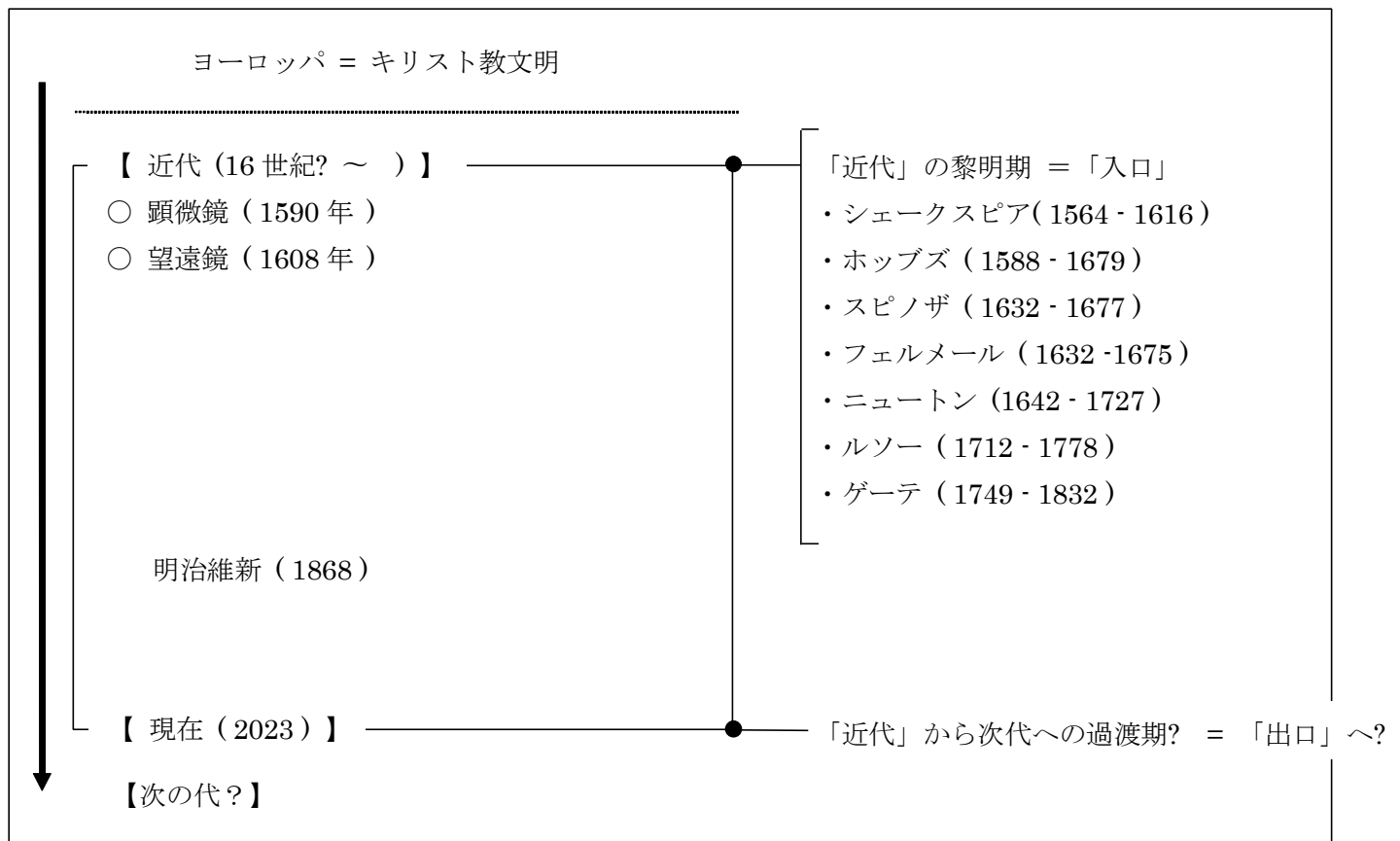
これらの著作をとおしてみえてきたのは、これまで自明とされてきた「世界」「時間」といった考えが、ガラリと変わるさまだった。この変化には、戸惑いを覚えるが、もしかしたらその動揺は、ニーチェ(独 1844 - 1900) の説く「神が死んだ」を前にした、キリスト教信徒とそうかわらないかもしれない。

神を称える森の聖者を、ツァラトゥストラは次のようにいう。

「いったいこんなことがありうるのだろうか! この年老いた聖者は、自分の森のなかにおいて、神が死んだことについて、まだ何も聞いていないのだ。」(『ニーチェ全集 9 ツァラトゥストラ』ちくま学芸文庫 p.24)

○ 「近代」について

「これまで自明とされてきた世界、時間」を仮に「近代」とすると、いま(2023)は近代から次の代への「過渡期」といえるのではないか。そして、今回の『フェルメールとオランダ黄金時代』は、近代の「黎明期」だと考えてみてはどうか。



そして、近代の「黎明期」と「過渡期」にともにいえるのは、(そのなかにはいつて、そこにどっぷりつかってしまおうとやがてみえなくなってしまう、) よくもわるくも「近代」という枠組みの限界が、よくみえていた、あるいは、よくみえるということではないか。つまり「転換期」として、同じくするものがあるのでないか。

生前は地方の画家扱いで世評も高くなく、ほぼ無名。死後も長く忘れられていた。どのくらい忘れられていたかと言えば、百五十年近く、何と十九世紀後半、印象派が勃興する頃になってようやくフランスで再発見再評価され、そこから徐々に世界中でファンを獲得していった。(『フェルメールとオランダ黄金時代』p.12)

時代をこえて、フェルメールの絵画に感動するのは、そのような「転換期」において、「近代」という枠組みの限界の、その外側を予感させるからでないか。

○ 「近代」の枠組みに与する思想と、その外側への思想（つつじ読書会 読書本から）

「近代」の枠組みに与する思想	その外側への思想
[経済] アダム・スミス(1723 - 1790)	マルクス (1818 - 1883) ・ 斎藤幸平 (1987-) カトリーン・マルサル (1983-)
[時間] ニュートン(1642 - 1727)	カルロ・ロヴェッリ (1965-)
	マルクス・ガブリエル (1980-)
...	
	フェルメール(1632 -1675)

○ フェルメールの光の珠、感想

- ・『牛乳を注ぐ女』(p.140 - 141)
 - ・『フェルメール「牛乳を注ぐ女」とオランダ風俗画展』2007年9月26日(水) - 12月17日(月) 国立新美術館
- 『新潮美術文庫 13 フェルメール』(1975)の解説(黒江光彦 1935 - 2022)では、「フェルメールは肉眼だけではなくて、レンズをとおして視ているとしかいいようがない」として、次のようにいう。

「「光の窓」のなかの「光の珠」はあるものではない。フェルメールが結像の過程で見出したものである。焦点を合わせる動きのなかからとらえたものである。それはまるで、草の葉からこぼれおちる露が葉先までつたわって行って、しずくとなって離れようとした瞬間に大きくふくれあがってきらりと光を放つのに似ている。光の珠は閃めく「光のしずく」なのである。たとえば《ターバンの少女》のつぶらな瞳は、まるで光でうるんでいる。口許は濡れた光を放ち、そして耳飾りの真珠は大粒にきらりと輝いてみえる。光の生動感、動きのある光の印象は、フェルメールの結像の操作、すなわち結像への動きのなかから輝きの極限を拾って画面に定着しているということと無縁ではなかろう。「光のしずく」のきらりと輝く一瞬なのだ。(p.82)」

この記述は、カルロ・ロヴェッリ『時間は存在しない』の以下の記述を想起させた。

実際さらに細かく見ていくと、いかにも「物」らしい対象でも、長く続く「出来事」でしかない。もつとも硬い石は、化学や物理学や鉱物学や地理学や心理学の知見によると、実は量子場の複雑な振動であり、複数の力の一瞬の相互作用であり、崩れて再び砂に戻るまでのごく短い時間に限って形と平衡を保つことができる過程であり、(中略)そしてそれは、わたしたちが知覚している対象より、むしろ知覚しているこちら側の身体構造に依拠したこの世界の細分化の一部であり、現実を構成する宇宙規模の鏡のゲームの複雑な結び目なのである。(p.99)

つまり、フェルメールはいかににも「物」らしい対象を描いたのではなく「出来事」を描いた。

「近代」はしばしば、確たる枠組みのなかへ「世界」や「時間」を馴致し、囲い込む(と、同時に排除する)。しかし、私はそのような囲い込みによって、窮屈そうにしゃちほこぼる「世界」や「時間」よりも、フェルメールの描く「出来事」に予感を感じる。

● おまけ その1

前掲のカルロ・ロヴェッリの「いかにも「物」らしい対象でも、長く続く「出来事」でしかない。」という記述は、福岡伸一の「動的平衡」とも響き合う。

シェーンハイマー(1898 - 1941)は、20世紀の科学史において、おそらくもっとも重要な生命の捉え方の転換を成し遂げることになる。かつてコペルニクス(1473 - 1543)が天動説を地動説に置き換えたようなパラダイム・シフト。それは、私たち生命を外的な環境から隔てているように見える界面が、実は、私たちを環境とつなげるためにある、という鮮やかな事実の提示だった。自然に見える安定さの中に、実は不自然なまでの流れがあり、それがほんとうの自然であるという意外な発見の宣明だった。

シェーンハイマーは、同位体を使うという斬新な方法で食べ物を構成する「元素」を標識した。それを実験動物に食べさせ、元素がどのように利用されるかを調べたのだ。当初、彼は、教科書どおり、食べ物の元素は参加され、体温やエネルギーを生み出し、燃えかすは二酸化炭素となって呼吸として出てくると予想した。ところがそれは鮮やかに裏切られた。食べ物の元素は、めまぐるしいほどの高速で、身体を構成する元素と交換されていたのである。つまり私たち生物は絶え間のない流れの中にある元素の溜みにすぎない。そして生命にとっては、つねに変わり続けることが、できるだけ変わらないための唯一の方法なのだ。それをシェーンハイマーは見事に示した。のちに私は、シェーンハイマーの業績を見直し、そこに提示された生命観を「動的平衡」と呼ぶことにした。以来、「動的平衡」は私にとって鍵概念となった。(福岡伸一『フェルメール光の王国』木楽舎 p.179)

フェルメールは短い期間に、あらゆることを可能にしていた。あえて不自然さを描き出すことが、実は自然のありようを示す最良の方法だということを示して見せたのだ。

幾何学的に正確な遠近法を追及すればするほど、人間の目にはそれがひずんだように見える。それを彼はベルリンの絵(『真珠の首飾り』)で確かめていた。(p.189)

● おまけ その2

福岡伸一は、『フェルメール 光の王国』で、フェルメールと、光学顕微鏡の先駆者、アントニ・ファン・レーウエンフック(1632 - 1723)との交友関係について仮説を述べている。レーウエンフックの手稿に添付された観察スケッチが、フェルメールによるものではないか、というものだ。

また、國分功一郎『スピノザ 読む人の肖像』では、フェルメールが、絵画制作で用いていたレンズを、スピノザから入手したという説が紹介されている(スピノザはレンズ磨きの技術をもっていた)。レーウエンフック、フェルメール、スピノザはみな生年が、1632年で同じ。また、「天文学者」「地理学者」のモデルは、スピノザに似ているという。(國分功一郎『スピノザ 読む人の肖像』p.80)

さらに、スピノザはニュートンがとなえる「真空」という考え方を否定したという。ニュートンの考えた世界では、空虚で様な「空間」なるものを想定するが、カルロ・ロヴェッリがアインシュタインを引いて解説するように、時間と空間は重力場であって、それは伸びたり縮んだり、波のようにうねることもある。スピノザの考え方は、現代の理論物理学者の考えに迫り得ていたとし興味深い、と國分功一郎は述べている。

スピノザもまた近代の黎明期にあって、近代の外側を見透していた哲学者だと考えられるとともに、そのスピノザのみならず、フェルメールや、レーウエンフックを輩出した「オランダ黄金時代」がとても興味深い。

● おまけ その3

「近代について」の図は、近代は、ベーコン(英 1561 - 1626)、ホッブズ(英 1588 - 1677)ロック(英 1632 - 1704)、ルソー(仏 1712 - 1778)、から始まる」という指摘に感化された。

その点、今回の『フェルメールとオランダ黄金時代』の p.79 の「オランダ黄金時代の年表」で日本が「応仁の乱(1467 - 1477)」から始まっていることが興味深い。『明治維新とは何か?』という本で、田中希生は東洋史家の内藤湖南(1896 - 1943)の『応仁の乱に就て』を引いていて、それによれば、応仁の乱は日本史上最大の

画期であり、乱以後の歴史と近代とを地続きのものを考えられるという。(田中希生『明治維新々論 王政復古と島崎藤村』小路田泰直/田中希生 編『明治維新とは何か?』 所収 東京堂出版) この考えにしたがえば、日本もまた、15 世紀後半から「近代」を準備していたことになる。

また、日本史で勉強するように、徳川幕府はオランダと通商関係があった。柄谷行人は、徳川体制は「戦後」の体制なのだという。

徳川の平和 Pax Tokugawana ということがよくいわれますが、その場合、国内の平和しか考えられていないのはおかしい。平和はやはり国家間で考えられるべきものですから。徳川の体制はまさに秀吉の朝鮮侵略を頂点とする 400 年に及ぶ戦乱の時代のあと、つまり「戦後」の体制なのです。ふりかえると、徳川の体制は、さまざまな点で、第二次大戦後の日本の体制と類似する点があります。(柄谷行人『憲法の無意識』 p.71)

このような徳川の平和の体制と、ヨーロッパの宗教戦争を経て独立したオランダに訪れた「無総督時代」を重ねてみたくなる。

無総督時代の間、最有力州ホラント州の首相ヨハン・デ・ウィット(1625-1672)が、オランダ全体のトップとして政治を牽引した(「オランダ大議長」との表記もある)。ウィットは都市貴族出身の法律家で、保険業理論を確立したことでも知られる。彼が大議長だった二十二年間が、オランダ黄金期中の黄金期だった。各州が主権をもつ自由な体制こそオランダ繁栄の鍵と考えた彼は、総督は不要との立場だった。(『フェルメールとオランダ黄金時代』 p.194)

デ・ウィットは大独占資本を解体し、地方分権体制や自由主義的経済の促進を訴え、共和制政治を目指した。だが、1672 年、第三次英蘭戦争を契機とした混乱の最中、デ・ウィットは「王」を求める民衆によって虐殺される。(『フェルメールとオランダ黄金時代』 p.196・p.197) デュマ(1802-1870)は、その場面を次のように描く。

「兄さん、兄さんはどこにいるんだ?」

怒り狂った連中のひとりが、一撃をくらわせ、ヤンの帽子がすっとなだ。

別の男がヤンに、自分の手を染めている血を見せびらかした。この男は、たったいまコルネリスの腹に風穴をあけてきたのである。死骸となってしまった人間のからだを、ほかの連中が断頭台にかけに引きずって行くあいだに、この男はまた風穴をあける機会をのがしてなるものかと、こっちのほうへと、とってかえしてきたのであった。ヤンは痛ましい呻き声をあげて、目の上に片手をやった。

「やあ!目を閉じやがったな、おまえは」と、市民兵のひとりがいった。「ようし、おれがその目をつぶしてやらあ!」その男は、ヤンの目に槍の穂先をぐさりとつきさした。血がほとばしった。

「兄さん!」と、デ・ウィットは、血しぶきで見えなくなった目でなおも、コルネリスのなりゆきを見とどけようとして叫んだ。「兄さん!」

「兄貴に会いに行かせてやらあ!」と、また別の人殺しが吼え立てて、火縄銃でこめかみを狙って引き金をひいた。だが、弾丸は出なかった。

するとその人殺しは、銃をさかさまにして、銃身を両手でにぎりしめ、銃尾でヤン・デ・ウィットをしたたかに打ちのめした。

ヤン・デ・ウィットはよろめき、足元に崩れ落ちた。

だが、すぐまたやっとの思いで立ち上がって、ヤンは叫んだ。

「兄さん!」

それはあまりにも痛ましい声であったので、例の青年(ウィレム三世 オランダ総督)は、目の前のカーテンを引いてしまった。

だが、じつはもうたいした見物は残っていなかったのである。新しく、第三の人殺しが現れて、ヤンにピストル

の銃口を押しつけたのである。今度は弾丸が発射され、頭蓋を打ちつらぬいた。

ヤン・デ・ウィットは、ばったりと倒れて、もう起き上がらなかった。

すると、群がり集まっていたあさましい連中は、獲物が倒れたので大胆になって、ひとり残らず死骸に弾丸をぶちこみたがった。ひとり残らず大槌や剣や短刀をつきさしたがり、ひとり残らず血をほとばしらせ、死骸のぼろぼろになった洋服をはぎとりたがった。

兄弟がしたたか打ち殺され、したたか剥ぎとられてしまうと、市民たちは、その一物も身にまとわぬ血まみれの死骸を急造の断頭台まで引きずっていき、そこでのわかごしらえの死刑執行人が、足をとって死骸を断頭台の上にのせかけた。

するとそこに、いままで生きた肉を打ちのめすことができないでいたいばん卑怯な手合がやってきて、死んだ肉をずたずたに刻んでこま切れにして、一切れ十スーで、ヤンとコルネリスの肉を町に売りにでかけて行った。
(アレクサンドル・デュマ『黒いチューリップ』 國分功一郎『スピノザ 読む人の肖像』より孫引き)

平和が脅かされ、内憂外患からスケープゴートになる時の為政者と、新たに担ぎ出される王という構図に「近代」の明暗をみるようだ。スピノザは犯行現場に「汝ら野蛮きわまる者ども」と抗議文を貼り付けようとしたという。

● おまけ その4

中村雄二郎（1925-2017）は『プラトーフ（1899-1951）考』で、16世紀終わりから、17世紀初め（ルネサンス末期）のシェークスピア（1564 - 1616）を近代の直前とし、19世紀終わりから20世紀初めのチェーホフ（1860 - 1904）を近代の終末として上で、前者の『ハムレット』を「ヒーロー解体の劇」と呼び、後者の『桜の園』を「ヒーローが解体しきってバラバラになってしまったあと」と位置づける。そして、シェークスピアの以下のテキストを引用する。「転換期」を言い当てる引例だと思う。

天体そのもの惑星でも、また宇宙の中心たるこの地球でも、上下の別を、序列を、位置を守ります。さらに規則、方向、釣り合い、季節、形式、職務、慣習、すべてが正しい秩序のもとに厳守します。

…ああ、上下の別がくずれ去れば、一切の偉大な計画へ通ずる梯子がなくなれば、事業は終わりです。社会の交わりが、学校の編成が都市の組合が海をへだてた国々の平和な貿易が長子の相続権が長上の特権が、王冠や王笏や月桂樹の特権が、これら一切、上下の別がなく、どうして正統な地位を保つことができますでしょうか？差別を排し、その弦の調子を狂わせれば、一切めちやめちやです。あらゆるものが対立し、抗争します。（『トロイラスとクレシダ』）

● おまけ その5

「近代」の枠組みに与する思想にニュートンをあげたが、ニュートンは色彩論でゲーテと対立している。

ゲーテから見れば、制御された実験のみによって自然の本質を明らかにしようとしたニュートンの姿勢は「自然を拷問台にかけ、あらかじめ自分が信じ込んだものを自然に自白させようとしたもの」（『論争編』114）であり、自然の多様性や相互作用を軽視する行為だった。光に焦点を当てて客観的に光学的現象を考察したニュートンに対し、人間の主観を重んじたゲーテは色彩の現象には光だけでなく眼の関与が大きいと考えた。当時こうした考えは理解されなかったが、ニュートン的な近代科学とは異なる方向性を示すものとして、後に知覚現象と生理的作用との密接な関わりへの注目につながった。（城一夫[監修] 色彩文化研究会[著]『配色の教科書』p.40）

とすると、ゲーテは「近代の外側への思想」にふりわけたくなる。

『つつじ読書会文集 第42号』で、『「人新世の資本論」を読んで』で指摘されていて知ることができたが、宇沢弘文が「コモン = 社会的共通資本」を着想したのは、マルクスではなく、ゲーテの思想に出会ったからだという。

● おまけ その6

近代 = 西洋近代と、考えたときに、大野秀さん講演会 2022 年 11 月 19 日(土) は大変興味深かった。

『 大人のための 100 選 ボルヘス(1899 - 1986)、マルケス(1927 - 2014) ラテンアメリカ文学を読む 』
この講演会の、南米アメリカ文学を紹介するなかで、大野さんが池澤夏樹(1945 -) のテキストを紹介していて、南アメリカ文学に、近代 = 西洋近代を相対化する可能性を示している。

1950 年～60 年代の頃、この世紀の早い時期に書かれたジョイス(1882 - 1941) の『ユリシーズ』とブルースト(1871 - 1922) の『失われた時を求めて』によって、文学はやれることをやりつくしてしまった、あとは縮小再生産でいくしかないということが欧米を中心によく言われていました。そこへ『百年の孤独』が出た。ガルシア=マルケスは、カフカ(1883 - 1924) やフォークナー(1897 - 1962) にずいぶん学んだけれども、『百年の孤独』そのものは欧米のどんな小説の伝統とも無縁であって、その技法は西欧的技法とはまったく違う、その新しさと、小説というものの可能性を切り開いたパワーが、世界に衝撃を与えたのです。小説はまだこんなことができるのか、と読書会が興奮につつまれたのを、ぼくはよくおぼえています。(池澤夏樹『現代世界の十大小説』p.42)

南米アメリカ文学は、「マジックリアリズム」と称される特徴があるという。そこでは近代 = 西洋近代が自明とする、「時間」「空間」とは異なるが、しかし「リアリズム」である世界が描かれる。

● おまけ その 7

上田さんが、『生田春月への旅 II 魂の彷徨』で紹介している、生田春月(1892-1930)の遺稿詩『海図』は、まさに近代の図地反転としても読める。

甲板にかかっている海図 - それはこの内海の海図だ -
じつとそれを見ていると、一つの新しい、未知の世界が見えてくる。
普通の海図では、海が空白だが、これでは陸地の方が空白だ。
ただわずかに高山の頂きが記されている位なものであるが、
これに反して、海の方は水深やその他の記号などで彩られている。
これが今の自分の心持ちをそっくり現してゐるような気がする。
今迄の世界が空白となつて、
自分の飛び込む未知の世界が彩られるのだ。

春月が「空白」と形容する世界が、まさに近代だとすると、春月が彩りを見る世界はそこにはなかった。
春月がその詩を翻訳しているハイネ(1797 - 1856) には『流刑の神々』という著作がある。ハイネはそこで、「近代」や、近代を準備したキリスト教文明が、仮借ない非寛容性をもってヨーロッパを席卷していったとき、民間信仰はいかなる変容をしいられたかという、歴史の暗部ともよぶべきテーマに注目していた。

教会は古代の神々を、哲学者たちのように、けっして妄想だとか欺瞞と錯覚のおとし子だとは説明せず、キリストの勝利によってその権力の絶頂からたたきおこされ、今や地上の古い神殿の廃墟や魔法の森の暗闇のなかで暮らしをたてている悪霊たちであると考えている。そしてその悪霊たちはか弱いキリスト教徒が廃墟や森へ迷いこんでくると、その誘惑的な魔法、すなわち肉欲や美しいもの、特にダンスと歌でもって背教へと誘いこむというのである。(ハイネ『流刑の神々・精霊物語』岩波文庫 p.125)

この近代以前への遡行は、「平地人を戦慄せしめよ」で知られる柳田国男(1875 - 1962) の『遠野物語』とも通じるものを感じる。『遠野物語』が出版されたのは、1910 年。まさにこの年に大逆事件が起こっている。